

平成31年3月10日

大阪府立大学21世紀科学研究センター大阪検定客員研究員
平成30年度研究成果報告書
～大阪検定1級合格者が、大阪の新たな観光魅力を提案～

大阪府立大学21世紀科学研究センター

研究テーマ	研究員氏名
大阪万博の遺産と次期万博への提言	湯川 敏男
大阪に遺る博覧会の痕跡から見えるもの ～忘れ去られた小規模博覧会「国防博」～	高木 昌之
「大阪の万博」と鉄道	前阪 恵造
大阪の万博と大阪のタワー	村田 幸雄
大阪万国博覧会開催時の都市開発 谷町筋の幅員拡大と周辺地域の変化についての考察	小辻 昌平

大阪万博の遺産と次期万博への提言

湯川 敏男

【目的】

1970年に吹田市の千里丘陵で開催された日本万国博覧会（以下「大阪万博」と表記）の遺産として継承されてきた物として、お祭り広場、太陽の塔、大阪日本民芸館（元日本民芸館）、EXSP'70パビリオン（元鉄鋼館）、夢の池、日本庭園などがある。また、パビリオンが林立していた跡地は緑豊かな自然文化園となり、新たに国立民族学博物館が開設されたことなどが知られている。しかし、大阪万博では計画当時、後世に何を伝え、何を残すかといった議論はあまり活発ではなく、自然淘汰的に残った物も多い。

万博のシンボルゾーンにあり太陽の塔と約1km離れて南北に向き合うように聳えていたシンボルタワーとしてのエキスポタワーは、後世に残す計画であったが、高さを当初計画の300mから127mに変更され、中途半端な塔となり、撤去されてしまった。逆に撤去予定であった太陽の塔は内部の生命の樹などが修復され再公開されている。

2025年日本国際博覧会（以下「次期万博」と表記）においては、計画段階から、後世に何を伝え、何を残すかといったビジョンを明確にする必要がある。この研究は、大阪万博の遺産として何が継承され、博覧会の理念と合致していたかを検証し、次期万博で何を伝え、何を残していくかを考える上での一助と成ることを研究の目的とする。

【内容】

開幕前から残す計画に挙がっていたパビリオン等には、日本館、万国博ホール、万国博美術館、日本庭園、夢の池、日本民芸館、鉄鋼館、エキスポタワー、日本万国博覧会協会本部ビルなどであるが、このうち日本館、万国博ホール、万国博美術館、エキスポタワーは現在残らず、当初予定のなかった太陽の塔、お祭り広場や大屋根の一部が残っている。そこで万博記念公園や府内に残る大阪万博の遺産から如何にして遺産と成り得たかを検証のテーマとしたが、その結論は偶然の要素が大きく、“次期万博においては当初から何を遺産として残すか明確にする”といった当たり前の提言となった。その他、タイム・カプセル EXPO'70 の開封周期の短縮や日本に現在4隻存在する江戸時代に活躍した千石船の復元船を次期万博会場に集結させることなどの提案となった。探訪の手引きとして別表「1970年に開催された日本万国博覧会の遺産」の一覧表を作成した。

【結果】

大阪万博の遺産の検証から次期万博への提言を導く研究であったが、遺産と成り得た物とそうで無い物との差異が見出せず、提言として、まとめることは出来なかった。

1. はじめに

1950年代半ばから未曾有の高度経済成長が続いていた日本は、1968年、西ドイツを追い抜きアメリカに次いで世界第2位の経済大国になった。このような時勢の中の1970年に吹田市の千里丘陵の赤土や竹藪で覆われた広大な敷地330haを拓き日本万国博覧会（以下「大阪万博」と表記）が開催された。取り壊すことが前提の117棟のパビリオン（展示館）が建設され、テーマ“人類の進歩と調和”の基、77カ国4国際機関が参加し、6421万人を超える入場者を記録し、夢のような183日間が過ぎた。万博跡地は公園として再整備され、数点のパビリオンなどが残され、1972年にそのうちの260haが万博記念公園となった。

この大阪万博の遺産として、どのような物や記憶が継承されているかを調査し、大阪・関西に誘致が決まった2025年日本国際博覧会（以下「次期万博」と表記）の遺産として、そのあり方や跡地の利活用方法も含めて、あるべき姿を提言する。

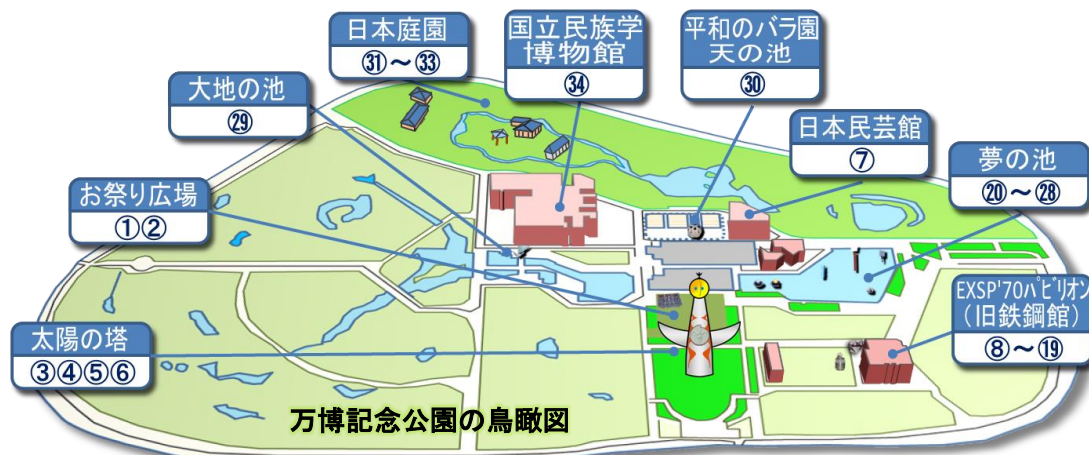
2. パビリオンとは

パビリオン（英: pavillion、米: pavilion、仏: pavillon）という言葉は、ラテン語でチョウまたはガを表すパピリオ（papilio）を原義とし、フランスで長方形の布を二つ折りにして野営で用いるテントがチョウの羽を畳んだ姿に似ることからパビリオンと称し、派生して、展示会や博覧会の仮設の展示館もパビリオンと呼称するようになった。日本では1970年の大阪万博で一般化した言葉で、あくまでも恒久的な建物ではなく、大阪万博においては、出展者が閉幕後6ヵ月以内にパビリオンを取り壊すことが条件であった。

3. 大阪万博の遺産（大阪地域に限定して）

まず、大阪万博の遺産を①万博記念公園の大阪万博の遺跡、②府内に残る大阪万博の遺産、③タイム・カプセル EXPO' 70、④大阪万博のインフラ（大阪万博のために準備された社会基盤）、⑤大阪万博が「始まり」（万博からあるいは万博が契機となったもの）などに分類し、リストアップし、別表「1970年に開催された日本万国博覧会の遺産」として一覧表に取りまとめた。それらを踏まえて、次期万博の理念と資産の継承のあり方についての提言を行う。

3.1 万博記念公園の大阪万博の遺跡（詳細は別表を参照、番号①～⑮は別表の番号に対応）



お祭り広場①とその上を覆っていた大屋根の一部②が現存。故岡本太郎デザインの太陽の塔③は耐震改修工事と内部の生命の樹④の静態修復が完了し、地下にあった第4の顔⑤も復元された。この塔の正面上部の黄金の顔⑥は2代目で、初代は後述の鉄鋼館に保存されている。日本民芸館⑦は万博後の1971年に「大阪日本民芸館」として再開館された。万博閉幕後も残すことを前提に建設されていた鉄鋼館⑧～⑮は、現在 EXPO' 70 パビリオンとして公開。夢の池⑲～⑳にある故イサム・ノグチ設計のオブジェ噴水群「宇宙空間の夢」が静態保存され、再生計画が進行中。大地の池㉑の北にはフィリップ・キング(英)のプロヘラ状の立体造形作品「空」が現存。平和のバラ園天の池㉒には故イサム・ノグチ設計のオブジェ噴水「月の世界」

が静態保存されている。日本庭園^⑧とその中の施設として迎賓館^⑨、茶室^⑩「汎庵・万里庵・千里庵」、水琴窟などが現存。1974年に故黒川紀章設計の国立民族学博物館^⑪が万博跡地に開館し、万博のために収集した世界各地の民族資料やその後の収集品が展示されている。日本万国博覧会協会本部ビルは「万博記念ビル」として当時のまま現存する。

3.2 府内に残る大阪万博の遺産（詳細は別表を参照）

兵庫県のこの時代の拠点部分が削除された氷上郡の飲食店から引き取られたウルグアイ館が池田市に現存。全日本仏教会が西口に設けた無料休憩所法輪閣は四天王寺「庚申堂」として移設され現存。2004年に中之島に開館した国立国際美術館は万国博美術館の後裔で、ガス・パピリオンに展示されていたジョアン・ミロ（スペイン）の「無垢の笑い」を移管展示。1968年に万博会場で執り行われた立柱祭で用いられた元柱は吹田市の神社「泉殿宮」に移設保存されている。

3.3 タイム・カプセル EXPO' 70

タイム・カプセル EXPO' 70 は毎日新聞社と1968年に創業50周年を迎えることとなる松下電器産業（現パナソニック）の共同実施で、「伝統と開発・5000年後の人びとに」をテーマに松下館を出展し、1970年時点の文化等を2,098点の収納品に托し、5000年後の人類に伝えるもの。万博終了後、正副2個のタイム・カプセル EXPO' 70 を、大阪城公園本丸跡の地下15mの縦穴に埋設。1970年から5000年後の6970年に開封される「第1号機」は地中14.37mの位置に、2000年に開封され、以降100年ごとに開封・点検・埋設を繰り返し、最終は6750年に開封される「第2号機」は地中9.50mの位置に埋設されている。

なお、カプセル本体は5個制作され、品質チェック用に薄く輪切りにされた1番目と5番目に鑄造されたカプセルは、それぞれ大阪歴史博物館に保管や展示。3番目と4番目はタイム・カプセル EXPO' 70 の副としての「第2号機」と正としての「第1号機」。2番目はパナソニックミュージアムものづくりリズム館に収納品の一部と共に展示されている。



3.4 大阪万博のインフラ（詳細は別表を参照）

モータリゼーションの台頭により1969年には、市電が65年半の歴史を閉じ、東名高速道路が全面開通し、夜行高速バスのドリーム号が開業した。1970年には、御堂筋と松屋町筋が南行き、四つ橋筋と堺筋が北行きの一方通行となり、新御堂筋が全面開通、中国自動車道の中国吹田ICと中国豊中IC間が暫定開通、阪神高速の西横堀と法円坂間、湊町と堺間などが開通し、一部道路に御堂筋、堺筋、土佐堀通、中央大通などの愛称が付与された。

地下鉄では千日前線が1969年に野田阪神と桜川間と谷町九丁目と新深江間が開業、1970年に桜川と谷町九丁目間が開通し、堺筋線が天神橋筋六丁目と動物園前間が開業した。御堂筋線が江坂まで延伸し、北大阪急行が江坂と万国博中央口間で開業し万博会場まで直通となった。また、近鉄が万博開幕当日に上本町（現大阪上本町）より近鉄難波（現大阪難波）まで延伸された。さらに、名古屋と新大阪間に快速「エキスポ」号、河瀬と新大阪と網干間に快速「万博」号が遠方から運行され、これらが今日の「新快速」へと発展した。

建築物では1969年に大阪マーチャンダイズ・マート（OMM）ビル、1970年に船場センタービル、大阪駅前第1ビルが全館完成した。また1970年に虹のまち（現なんばウォーク）の御堂筋以西、1970年に堺筋以西が開業し、2019年に撤去が予定されているウメダ地下センター（現ホワイトいうめだ）の東部分の泉の広場などが完成した。

3.5 大阪万博が「始まり」（詳細は別表を参照）

万博で紹介され、その後普及した食品として**缶コーヒー、ケンタッキーフライドチキン、プレーンヨーグルト、フランスパン、ソフトクリーム、回転寿司**などがある。

世の中を便利にする製品として**電波時計、携帯電話、電気自動車、電気自転車、シヤチハタ**、**LAN**（ローカル・エリア・ネットワーク）、**テレビ電話、ピクトグラム、人間洗濯機**などがあり、同じく万博で紹介され、その後普及した技術として**動く歩道、地域冷房システム、エアドーム、アストロラマ、リフトアップ工法、メタボリズム理論**などがある。

4. 次期万博への提言

誘致活動が実り 2018 年 11 月 24 日の未明に次期万博の大阪・関西での開催が決定した。この万博は大阪湾の人工島夢洲で「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに開催される。大阪での万博の開催は、55 年ぶり 2 回目となる。

次期万博においては残存させるパビリオンは当初より後利用を考慮し、後世に引き継ぐ。また、人の一生に 2、3 回は体験できるように**タイム・カプセル EXPO' 70（第 2 号機）の開封周期を現行の 100 年ごとから 25 年ごとに変更**し、次回開封開催を大阪万博から 55 周年目の次期万博時とする。さらに、次期万博でも「**タイム・カプセル EXPO' 25**」を企画し、その収納品の一つに 3D-8K の**ビデオレター「未来への伝言」**を設け、未来のあなた、未来の家族、未来の世界などへの伝言を収録したメディアを加える。さらに、テーマには未来とあるが、参加国の歴史や文化を紹介することも重要な要素である。現在全国に 4 隻存在する江戸時代に日本全国から大阪に寄港した**千石船**を模した復元船を万博会場に集結展示する。その船とは 2011 年の東日本大震災の大津波を乗り切ったが、船体の腐食が進んでいる**気仙丸**、佐渡の**白山丸**、閉鎖中のなにわの海の時空館の**浪華丸**、青森県の**みちのく丸**である。これらの船は陸揚げされているものや廃船計画のあるものもあり、事は急を要する。

船名	種類	積載	全長	幅	航路	進水年	所在地
気仙丸	弁才船	350石積	18m	5.8m	東廻り航路	1992年	大船渡商工会議所
白山丸	北前船	512石積	23.8m	7.2m	西廻り航路	1998年	佐渡国小木民俗博物館
浪華丸	菱垣廻船	1000石積	29.9m	7.4m	南海路	1999年	なにわの海の時空館(閉鎖中)
みちのく丸	北前船	1000石積	32m	8.5m	東/西廻り航路	2005年	青森県野辺地町常夜燈公園

次に 2025 年に大大阪時代から 100 周年と昭和 100 年を迎えることを記念し、市長であった池上四郎、関一を顕彰し、近代建築や大阪城天守閣、御堂筋、地下鉄などを紹介する。

5. おわりに

大阪万博の遺産を検証し、次期万博への有益な提言を試みたが、遺産と成り得た物とそうで無い物との明確な相違は見られず、当たり前一般的な提言となってしまった。

次期万博では、人工知能 (AI)、仮想現実 (VR)、拡張現実 (AR) などを駆使して紹介・体験される高度先端医療やモノのインターネット (IoT) などの展示だけではなく、アナログ型人間でも主役になれるような万博を切に願う。また、2019 年は主要 20 カ国・地域 (G20) 首脳会議とラグビー・ワールドカップ、20 年には東京オリンピック・パラリンピック、21 年には関西ワールドマスタースゲームズ、24 年には統合型リゾート施設 (IR) 開業などのイベントが目白押しであるが、疲弊しないで次期万博が無事迎えらることを祈る。

<参考文献>

- ・ EXPO' 70 パビリオン -大阪万博公式メモリアルガイド-橋爪 紳也/監修 // 平凡社 // 2010
- ・ 1970 年大阪万博の時代を歩く -戦災からの復興、高度経済成長、そして万博へ- 橋爪 紳也/著 // 洋泉社 // 2018
- ・ 大阪万博 -20 世紀が夢見た 21 世紀-平野 暁臣/編著 // 小学館クリエイティブ // 2014
- ・ 日本万国博覧会公式ガイドマップ講談社/企画・編集 // 日本万国博覧会協会 // 1970
- ・ 日本万国博覧会公式ガイド日本万国博覧会協会 // 1970
- ・ 大阪春秋 第 131 号 特集ミナミ 新風書房 // 2008
- ・ 大阪春秋 第 140 号 特集大阪と博覧会 新風書房 // 2010
- ・ 大阪春秋 第 146 号 特集ディープサウス隈 新風書房 // 2012
- ・ 現代遺跡 -現代風俗 '91-現代風俗研究会/編集 // リプロポート // 1990
- ・ なにわ大阪再発見 第 3 号梅棹 忠夫/監修 // 大阪 21 世紀協会文化部 // 2000
- ・ 週刊朝日百科 日本の歴史 106 近代 1-7 朝日新聞社 // 1988
- ・ 月刊島民 中之島 -橋を渡る人の「街事情」マガジン- 2010 年 5 月 / Vol. 22 月刊島民プレス
- ・ 博覧会と明治の日本 (歴史文化ライブラリー 298) 國 雄行/著 // 吉川弘文館 // 2010
- ・ 中学生の万国博覧会、日本万国博覧会教育研究会/編、(樹教材研究所) // 1970
- ・ なつかしき未来「大阪万博」 -人類は進歩したのか調和したのか- 大阪大学 21 世紀懐徳堂/編 // 創元社 // 2012
- ・ 「大阪の博覧会」展 (大阪府立中之島図書館特別展示 平成 10 年度)大阪府立中之島図書館 // 1998

1970年に開催された日本万国博覧会の遺産一覧

湯川敏男

表1 万国記念公園の大阪万博の遺跡一覧 (2019年3月現在)

No.	展示館名等	展示物名/作品名等	解説
1	お祭り広場	お祭り広場(現存:大屋根なし)	高さ30mの大屋根が架かっていた
2	お祭り広場	大屋根の一部	「大屋根」の一部がモニュメントとして展示
3	太陽の塔	太陽の塔(現存)	高さ70m、基底部直径20m
4	太陽の塔	生命の樹(修復)	樹は高さ41mで33種の生き物の模型を展示
5	太陽の塔	第4の顔(復元)	写真などから三次元に復元され展示
6	太陽の塔	黄金の顔(2代目)	初代「黄金の顔」は現在は分解され倉庫に保管
7	日本民芸館	日本民芸館(現存)	現大阪日本民芸館
8	鉄鋼館	鉄鋼館(現存)	現EXPO'70パビリオン
9	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	スペースシアター(入室不可)	高さ17m、40m四方、スピーカー1008個のホール
10	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	バシェ兄弟(仏)「音響彫刻」(復元)	17点の作品のうち5点の「音響彫刻」を復元
11	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	エキスポタワーの塔灯(展示保管)	タワー上に設置されていたキセノン灯光器
12	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	電気自動車(展示保管)	ダイハツ製で、タクシー、警備車など275台を納入
13	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	電気自転車(展示保管)	三洋電機が開発、報道関係者に10台貸出
14	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	日本館のリニアモーターカーの模型	自動運転ではなく有人運転を想定し運転席あり
15	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	日本館の電動の文楽人形	文楽人形3体(八重垣姫、松王丸、若菜)
16	鉄鋼館(EXSP'70パビリオン)	テーマ館の岡本太郎「手の椅子」	手は岡本太郎が好んだモチーフの一つ
17	鉄鋼館(パビリオン前)	エキスポタワーの展望室(展示)	展望室は多面体のキャビンで増築改築可能
18	鉄鋼館(パビリオン前)	国連館の平和の鐘(レプリカ)	「世界絶対平和萬歳」と刻印
19	鉄鋼館(パビリオン北)	チェコスロバキア館のガラスの川	21.5m×3.8m、重量9t、200個のブロック
20	夢の池	夢の池(現存)	イサムノグチによって設計
21	夢の池オブジェ噴水群	6種9基のうち以下の5種6基が現存	「宇宙空間の夢」と題したオブジェ噴水群
22	夢の池オブジェ噴水A	「宇宙船」2基	黄・黒色に塗った2基のドーム状噴水器
23	夢の池オブジェ噴水B	「星雲」1基	円筒全体にちりばめた噴霧ノズル
24	夢の池オブジェ噴水C	「彗星」1基	池面上33mの巨大な立方体型噴水
25	夢の池オブジェ噴水D	「コロナ」1基	池面上5mの箱型噴水
26	夢の池オブジェ噴水E	「惑星」1基	高さ約7mのドーナツ形噴水
27	夢の池周辺(南西北)	若林奮「3.25mのクロバエの羽」	歩道に描画(5m×1m×8m)の鋼板作品
28	夢の池周辺(中央北)	井原通夫「作品」	31.5m×4m×3.3mのパイプの構築作品
29	大地の池(中央橋北詰)	フィリップ・キング(英)「空」	12m×4m×12mのプロペラ状の作品
30	平和のバラ園の天の池	月の世界	直径4mの球体噴水(現在天の池はなし)
31	日本庭園	日本庭園(現存)	ほぼ当時のまま現存する池泉回遊式庭園
32	日本庭園	迎賓館(現存)	国内外からの貴賓を歓待する施設
33	日本庭園	茶室「汎庵・万里庵・千里庵・水琴窟」	万国博開催時に内外からの来賓接待用
34	国立民族学博物館	国立民族学博物館(万博後に建築)	万博後、展示した世界各地の民族資料を公開
35	万博記念協会本部ビル	万博記念協会本部ビル(現存)	現万博記念ビル
36	東口の斜張橋	万博記念公園東口斜張橋(現存)	国内初のPC(プレストレストコンクリート)斜張橋
37	万国博電報電話局	万国博電報電話局(現存)	現NTT西日本万国博ビル

②～⑩は表のNo.に対応

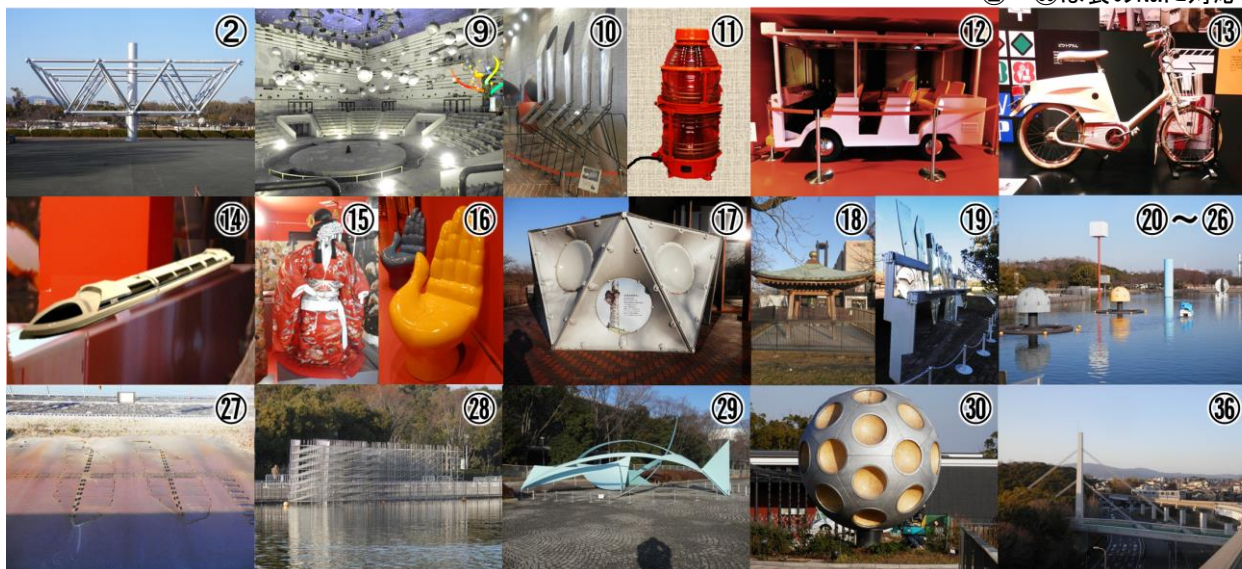


表2 府内に残る大阪万博の遺産一覧

(2019年3月現在)

No.	展示館名等	展示物名/作品名等	移転先(場所)	解説
1	万国博美術館	猪熊弦一郎「垂直都市」	大阪マーチャングイズ・マート(OMM)ビル1階西エレベーターホール	「THE CITY VERTICAL」(RED No.3)
2	万国博美術館	「マーキュリー」像	大阪マーチャングイズ・マート(OMM)ビル前(レプリカ)	OMM開館3周年記念(1972)に設置
3	ウルグアイ館	ウルグアイ館本体	飲食店(兵庫県)⇨万博ミュージアム(池田市姫室町)	元はラーメン店舗の1部に転用
4	カナダ館	イヌイットの像	吹田市文化会館メシアター(吹田市泉町2丁目)	会館西1階入口の壁に埋設
5	ニューゼaland館	W.R.アレンのステンレスパイプのオブジェ	吹田市立中央図書館(吹田市出口町)	図書館敷地内南西角のオブジェ
6	ニューゼaland館	ロイ・コワンのモザイクタイル画「太平洋」	吹田市立中央図書館(吹田市出口町)	館内1階、児童フロア奥の壁一面
7	ガス・パビリオン	ジョアン・ミロ(スペイン)「無垢の笑い」	国立国際美術館(北区中之島)	B1階パブリックゾーン壁面の巨大陶板画
8	松下館	タイム・カプセル(正:第1号機)	日本国(大阪城公園本丸跡の地中14.37m)	1970年から5000年後の6971年に開封
9	松下館	タイム・カプセルの収納品(正)	日本国(大阪城公園本丸跡の地中14.37m)	全収納品の数は、317件、2,098点
10	松下館	タイム・カプセル(副:第2号機)	日本国(大阪城公園本丸跡の地中9.50m)	2000年から100年ごとと6970年に開封
11	松下館	タイム・カプセルの収納品(副)	日本国(大阪城公園本丸跡の地中9.50m)	全収納品の数は、317件、2,098点
12	松下館	館名「松下館」の石碑	松下電器(現パナソニック)ミュージアム	ものづくりイズム館で展示
13	松下館関連	タイム・カプセル複製(铸造2番目)	松下電器(現パナソニック)ミュージアム	ものづくりイズム館で展示
14	松下館関連	タイム・カプセルの収納品(同型品)	松下電器(現パナソニック)ミュージアム	ものづくりイズム館で展示
15	松下館関連	タイム・カプセルの木(アカマツ)	松下電器(現パナソニック)ミュージアム道路側桜の根元	2000年3月の開封時に種子取出育成
16	サンヨー館	人間洗濯機	サンヨー⇨松下電器(現パナソニック)ミュージアム	正式名「ウルトラソニック・バス」
17	松下館関連	タイム・カプセル複製(铸造5番目)	大阪市(大阪市立博物館⇨大阪歴史博物館)	大阪歴史博物館1Fで展示用
18	松下館関連	タイム・カプセルの収納品(同型品)	大阪市(大阪市立博物館⇨大阪歴史博物館)	全収納品の内、約100点を常設展示
19	せんい館	四谷シモン「ルネ・マグリットの男」	洋服屋を廃業し現在仕舞屋(平野区上町2丁目)	「ルネ・マグリットの男」1体が玄関口に
20	休憩所「法輪閣」	休憩所「法輪閣」本体	四天王寺庚申堂(天王寺区堀越町)	全日本仏教会が建築した無料休憩所
21	立柱祭「元柱」	地鎮祭・立柱祭「元柱(もとつはしら)」	神社「泉殿宮」(吹田市西の庄町)	1968年3月15日に立柱祭が斎行された
22	エクアドル館	エクアドル館のハーフミラー	H学園M幼稚園(豊中市新千里西町)	事務所(2016年に解体)
23	モナコ館	モナコ館のハーフミラー	H学園M幼稚園(豊中市新千里西町)	事務所(2016年に解体)
24	キプロス館	キプロス館本体	T会幼稚園(平野区流町2丁目)	園舎(2010年に解体)
25	電気通信館	電気通信館の技術展示室部分	現NTT西日本研修センタ(大阪市都島区)	万国博記念体育館(2014年に解体)

①～⑳は表のNo.に対応

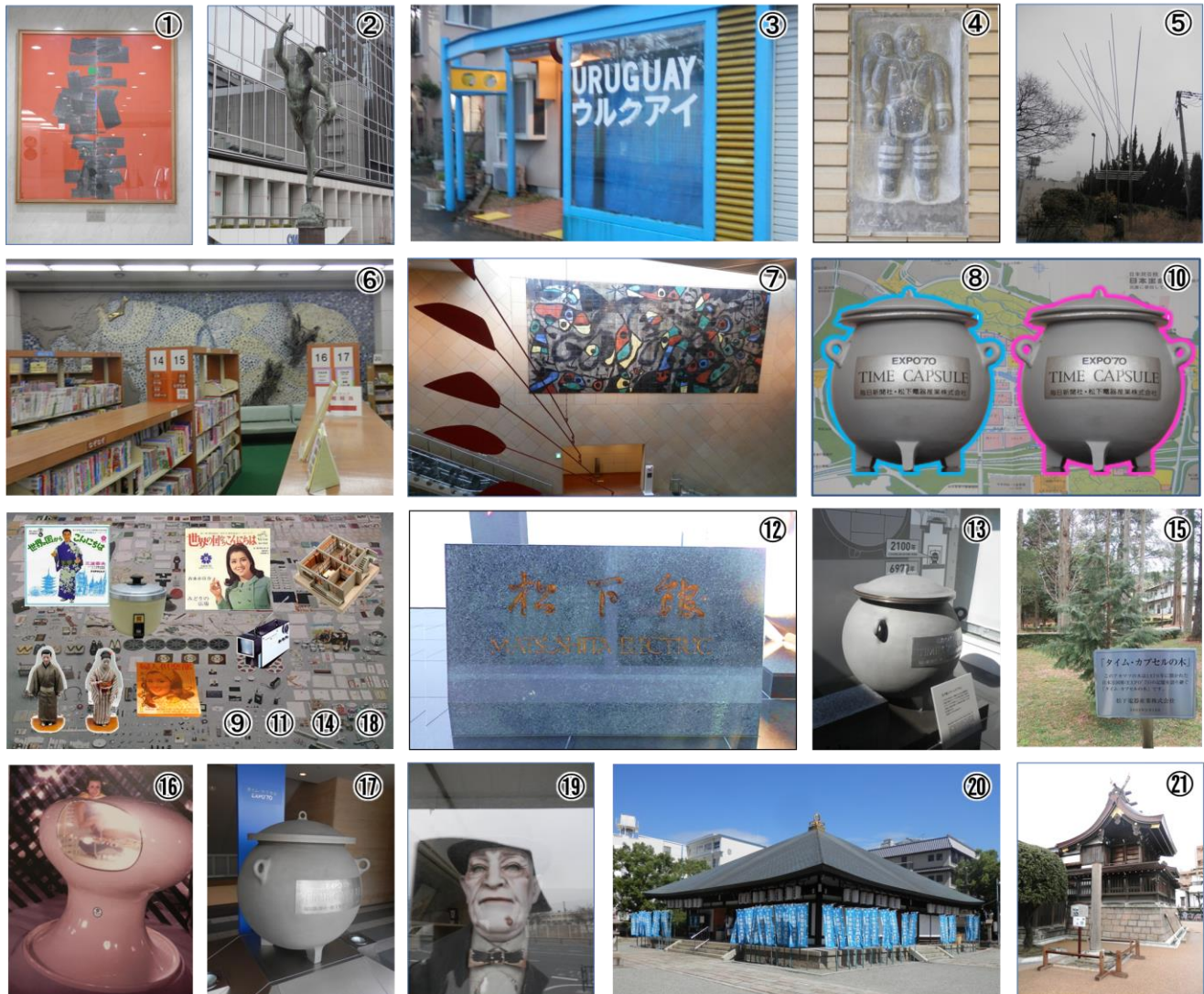


表3 大阪万博のインフラ一覧 (大阪万博のために準備された社会基盤) (2019年3月現在)

インフラ名	概 要
ドリーム号	1969年に東名高速道路が全面開通し、東名と名神を直通する夜行便として夜行高速バスが東京から大阪・京都・名古屋への運行を開始。「ドリーム大阪号」などの愛称は1989年より。
道路の一方通行	1970年1月に大阪市内を南北に縦貫する主要道路を渋滞の緩和と事故防止対策として双方向通行から御堂筋と松屋町筋が南行き、四つ橋筋と堺筋が北行きの一方通行となった。
新御堂筋	1964年の東京オリンピックの直前に新淀川大橋の鉄道部分と上流側が開通、万博開催前年の1969年に新淀川大橋より下流側が完成し、全面開通した。
中国自動車道	1970年の万博直前に中国吹田ICと中国豊中ICが開通、万博中に中国豊中ICと宝塚ICが開通。このとき、北大阪急行の万国博中央口駅は中国道の上り線用地に設けられていた。
阪神高速道路	1970年の万博直前に船場センタービルの上屋に13号東大阪線(西横堀 - 法円坂)、その他、14号松原線(環状線 - 阿倍野)、15号堺線(湊町 - 堺)、17号西大阪線全線が開通。
道路に愛称	1969年に市公募で上町、谷町、あべの、新御堂、四つ橋、なにわ、あびこ、御堂、堺、松屋町の各筋と中之島、土佐堀、本町、長堀、千日前、みなとの各通および中央大通に決定。
千日前線	1969年に野田阪神と桜川、谷町九丁目と新深江間が開業。1970年の万博開幕直前に桜川と谷町九丁目間が開通。なお、新深江と南巽間が開通し全通したのは1981年。
堺筋線	1969年、天神橋筋六丁目と動物園前間が開業し、阪急千里線・京都本線との相互直通運転が開始された。動物園前と天下茶屋間が開通し全通したのは1993年。
御堂筋線	1970年の万博開催直前に新大阪から江坂に延伸。同時に開通した北大阪急行南北線の千里中央(仮設)経由で会場線の万国博中央口間まで相互直通運転を開始。
地下鉄駅名の改名1	1969年、船場センタービル完成により中央線の本町駅が御堂筋線と連絡、合わせて連絡された四つ橋線の信濃橋駅の駅名を本町駅に改称。
地下鉄駅名の改名2	1970年の万博開催直前、千日前線の開通に伴い、四つ橋線の難波元町駅の駅名を難波駅に改称。ただし案内表記は「なんば」とひらがな書となっている。
地下鉄各路線の愛称	1969年に各路線に愛称を付与。1号線から6号線を御堂筋線、谷町線、四つ橋線、中央線、千日前線、堺筋線と命名。なお、長堀鶴見緑地線は1990年、今里筋線は2006年に開通。
北大阪急行電鉄	1970年の万博開催直前、江坂から千里中央(仮設)経由で万国博中央口間で開業し御堂筋線と万博会場を結ぶ。なお同社は阪急電鉄と大阪府などが出資の第三セクター。
北大阪急行電鉄の駅移動と廃止	1970年の万博終了直後の9月14日にの千里中央(仮設)と万国博中央口間の会場線部分が廃止。千里中央駅はせんちゅうパル内に移動。仮設駅跡は中国自動車道となる。
近鉄難波線延伸	万博開幕当日の3月15日に上本町より近鉄難波に奈良線が延伸された。なお、2009年に阪神なんば線と相互直通運転を開始し、上本町は大阪上本町、近鉄難波は大阪難波に駅名を改称。
新快速の先駆け	万博会場を結ぶため、名古屋と新大阪間に快速エキスポ号、彦根市の河瀬と姫路市の網干間に快速万博号が運行。万博終了後、快速の進化形として新快速の運行が開始された。
大阪マーチャндаイス・マート(OMM)ビル	1969年に大阪市、京阪などが出資する第三セクター(現在は京阪の完全子会社)が開業。正面玄関前の商業神のメルクリウス(マーキュリー)像はイタリア館に展示像のレプリカ。
船場センタービル	1970年の万博開幕直前に地下鉄中央線、駐車場、テナント、阪神高速道路を重ねるというアイデアで開業。ビルのテナントは中央大通の建設で立ち退きになった船場の繊維街など。
大阪駅前第1ビル	ダイヤモンド地区と呼ばれた戦後の闇市の雰囲気が残る大阪駅前に1968年12月に西半棟が完成、万博開幕直後の1970年4月には東半棟が竣工し全館完成。
虹のまち	1970年の万博開幕直前にミナミ地下センター(のち虹のまちに改称)の御堂筋以西(第1期)が開業、翌年の1971年に堺筋以西(第2期)が開業。1994年になんばウォークに改称。
泉の広場	1963年にウメダ地下センター(現ホワイトイウム)の御堂筋線以西、1970年に自然との共生を謳う泉の広場を含む第2期部分が完成。なお、2019年に泉の広場は撤去予定。

表4 大阪万博が「始まり」一覧 (万博からあるいは万博が契機となったもの) (2019年3月現在)

商品名	概要
缶コーヒー	1969年にUCC上島珈琲が世界初のミルク入り缶コーヒー「UCCコーヒーミルク入り」を開発。70年の万博会場内の飲食店や国内外のパビリオンに売り込み日本中に知られるようになった。
ケンタッキー	日本上陸を目論んでいた「ケンタッキー・フライド・チキン(KFC)」は、アメリカ館に試験店舗を出店。売上は好調で日本KFCを創業し全国展開する。日本初上陸のファストフードとなる。
プレーンヨーグルト	「明治乳業」がブルガリア館からサンプルの譲渡を受け開発1971年の発売にこぎつけた。なお、明治ブルガリアヨーグルトの「ブルガリア」部分のフォントはブルガリア館と同じもの。
フランスパン	大阪万博に出店したフランスパンの「ドング」は半年間で1億7千万円を売り上げ、これがきっかけでフランスパンの知名度が上がり、そのオシャレ感により全国に広まった。
ソフトクリーム	1951年にソフトクリーム総合メーカー「日世」が初めて日本に紹介。同社は太陽の塔の直下に直営売店を開く、会場の200カ所に機材を設置。その後全国にソフトクリームブームが起こる。
回転寿司	「元禄産業」が1958年に近鉄・布施駅前にオープンした「廻る元禄寿司」は万博に出展し、優良店として表彰され知名度を得て回転寿司が、全国に知れわたることとなった。
電波時計	服部時計店(現セイコーHG)が、ルビジウム原子時計を中核にUHF電波で会場内の子時計50カ所に送る無線コントロールシステムを実用化。今日の電波時計の先鞭となった。
携帯電話	日本電信電話公社(現NTTグループ)が「電気通信館」で実演展示した「ワイヤレステレホン」が原型。重さは約660グラムで国内へのダイヤル通話が1人最長約30分無料で楽しめた。
電気自動車 1830年代に試作車あり	池田市の「ダイハツ工業」が電気自動車275台を提供。タクシー、プレスカー、パトロールカーなどとして活躍。排ガスを出さず音も静かな「未来都市の車」として来場者を驚かせた。
電気自転車	会場内の緊急連絡や取材に備え貸し出された電気自転車は「三洋電機」が市販に先立って10台提供したものでプレスセンター前に充電設備を整え、報道陣から重宝がられた。
シヤチハタ	「シヤチハタ」は生活産業館に出展し、企業パビリオンにも朱肉がいらぬXスタンパーを提供し、記念スタンプとして来場者はこぞってなつ印し、全国に知られるようになった。
LAN(ローカル・エリア・ネットワーク)	会場の管理・運営を円滑にする情報通信システム。通信回線でセンタと会場内の端末とを結び、入場者数のチェック、駐車場への誘導、迷子探し、催し物の検索などを実施した。
テレビ電話	迷子になった際は、迷子センターで親と子供の迷子ワッペンをコンピューターで照合し、テレビ電話の映像と音声で互いを確認するシステムになっていた。
ピクトグラム	「外国人でも誰が見てもわかるマークを作ろう」と1964年の東京オリンピックで著作権フリーで発表。万博でさらに洗練・拡充され世界に広まった。ISOで規格化が進められたいる。
ウルトラソニック・バス(人間洗濯機)	サンヨー館で展示。流線形のカプセルの中に座って肌を清潔にするだけでなく、マッサージボールや超音波の働きによって、健康と美容の両面に効果のある全自動バス。
動く歩道 1893年シカゴ万博に登場	1967年に阪急梅田駅に「ムービングウォーク」という呼称で設置された。3年後の大阪万博で冷房完備の屋根付きの動く歩道が設置され日本に広く知られるようになった。
地域冷房システム	万博会場の北、東、南の3カ所に機械室を設け各パビリオンや施設そして透明のパイプで覆われた動く歩道にパイプラインで冷気を供給した日本初の広域システム。
エアドーム(空気膜構造)	「アメリカ館」は、メロンパンのような網目模様が特徴のドーム。1988年開業の東京ドームなどで採用された独特のテント屋根は、淀川区に本社がある太陽工業が施工。
アストロラマ	「みどり館」で公開。5台のカメラで撮影し、5台の映写機で投影する全天周映画。その後、ポートピア'81、つくば'85(科学博)、EXPO'90(花博)、EXPO'05(愛・地球博)でも活躍。
リフトアップ工法	お祭り広場の大屋根は地上30mの高さで、3万2千㎡の広さ。地上で大屋根を組立てたのち、上に持ち上げ、取り付ける工法が用いられた。電力館、富士通パビリオンも同工法。
メタボリズム理論	黒川紀章や菊竹清訓らが提唱した建築運動。建物の増築改築縮小に応じてカプセルやユニットの部品を増減する手法。効ラ・ヒューティオン、住友童話館、エキスポタワーでも適用。

大阪に遺る博覧会の痕跡から見えるもの ～忘れ去られた小規模博覧会「国防博」～

高木 昌之

【目的】

2018年（平成30年）11月の開催地決定を受け、大阪、そして関西は、2025年の万国博覧会開催に向けその動きを加速させている。国際博覧会としては、1990年（平成2年）の国際花と緑の博覧会（花の万博）以来35年ぶりの大阪開催となる。

大阪の博覧会と言えば、まず1970年（昭和45年）の日本万国博覧会（大阪万博）をイメージする。その大阪万博のシンボルとも言える太陽の塔が、耐震補強・内部復元工事を終え、昨年3月から一般公開され、ますますその存在感を高めている。

しかし実際は、大阪では大阪万博以外にも、花の万博や1903年（明治36年）の第5回内国勸業博覧会をはじめ多数の博覧会が開催されてきた。大阪市内には、太陽の塔ほど象徴的かつカリスマ性を備えたものは存在しないが、今でも幾つかの博覧会の遺物は健在である。

今回の研究では、これまでに開催された博覧会、特に忘れ去られた小規模博覧会に脚光を当て、その痕跡を探し出し浮かび上がらせることによって、万博開催に向けての機運盛り上げの一助となることを目指す。

【内容】

大阪市内の市街地でこれまで開催された多種多様な博覧会のうち、幾つかの条件で絞り込み、6つの博覧会を抽出した。

その中で、最も博覧会開催会場らしからぬ場所・今里で、今年4月でご退位される今上天皇の御生誕を祝って開催された「皇太子殿下御生誕記念 非常時国防博覧会（略称：国防博）」に着目した。

ただ、この博覧会、分かっているのは大阪市今里で開催されたことぐらいで、新聞記事や絵葉書は残されているものの、その具体的な開催場所は分かっていない。そこで推論を交えながらその特定を行うことにした。

【結果】

様々な状況から、「国防博」の具体的な開催場所は、現在の生野区新今里の一角ではないかと推定した。

但し、生野区関連の書籍にも一切記載はなく、現地調査でもそれらしい痕跡を見つけることはできなかった。確証を得るところまで至らなかったのは極めて残念である。

その一方で正しい開催期間を明らかにすることができたのは大きな収穫であった。今後も、「国防博」の全貌解明に向け調査研究を継続していきたい。

1. 今こそ忘れ去られた博覧会を振り返る好機

大阪ではこれまで多くの博覧会が開催されてきたが、メジャーなものはほんの一握りに過ぎず、ほとんどの博覧会は歴史に埋もれてきた。2025年大阪・関西万博の開催が決定し、関西全体で万博開催への機運が盛り上がりつつある今こそ、これら“忘れ去られた小規模博覧会”を掘り起こす好機と考えた。

そこで、下記4条件に基づき、“忘れ去られた小規模博覧会”候補をリストアップしてみた。その結果が下表である。

- (1) 大阪市内の市街地で開催。〈主な除外〉日本万国博覧会
- (2) 万国博覧会ではない。〈主な除外〉国際花と緑の博覧会
- (3) 開催は1回限り。〈主な除外〉国際食博覧会
- (4) 他の博覧会で使用されることがない会場で開催。

〈主な除外〉第五回内国勸業博覧会

大阪市内の市街地で開催された小規模博覧会一覧

博覧会名	期間	会場	主催	入場者数
電気大博覧会	1926. 3. 20～5. 31	港区八幡屋町ほか	社団法人電気協会	2,900,362人
満蒙軍事博覧会	1932. 4～	大阪城前	夕刊大阪新聞社	
競馬法実施十周年記念馬匹博覧会	1933. 10. 15～10. 24	大阪城東練兵場	帝国馬匹協会	375,116人
皇太子殿下御生誕記念非常時国防博覧会	1934. 4. 1～6. 10	今里	大阪時事新報社、愛国協会	
産業総動員工業大博覧会	1935. 4. 1～4. 30	大手前ほか	日本工業新聞社ほか	473,006人
復興大博覧会	1948. 9. 18～11. 17	天王寺夕陽丘	毎日新聞社	1,600,000人

※大阪府立中之島図書館『「大阪の博覧会」展』の「大阪で開催された主な博覧会一覧」を基に作成。

2. 「皇太子殿下御生誕記念 非常時国防博覧会」とは

抽出した6つの博覧会のうち、具体的な開催場所さえも分からない忘れ去られた状態にあるのが、「国防博」である。残されたヒントは当時の新聞記事と数枚の絵葉書による情報のみである。

大阪市今里の空き地で、1934年（昭和9年）4月1日（日）から6月10日（日）まで、大阪時事新報社と愛国協会の主催で開催された。非常時の国防思想を深め、次の時代の科学戦に備えようとの趣旨で開催された軍事啓蒙の博覧会で、5万坪の会場には、まず、展示館随一の高塔を誇り、そのうねネオンを輝かせる祝奉館、本館、陸軍館、海軍館、射撃館、愛国館、次の時代館、大パノラマ館、演芸館のほか、黒人唯一の独立国エチオピア館が特設されたという。

ただ決して堅苦しいだけの博覧会ではなかったようだ。催物はかなり充実していて、軍用犬実演や今里芸妓による国防踊、大サーカス、高級萬歳等が行われ、とりわけ女角力にはかなり力を入れていたようである。

今回は、謎に包まれたままとなっている会場場所の特定を中心に研究を行うことにした。



「皇太子殿下御生誕記念 非常時国防博覧会」絵葉書（私蔵品）

3. 「皇太子殿下御生誕記念 非常時国防博覧会」の開催場所の特定

会場の場所については、「大阪時事新報」に「東大阪の新繁華街今里」等の記述があることから、今里新地の一部もしくは隣接地にあったと考えるのが妥当であろう。

今里新地は、1929年（昭和4年）に事業認可を受け1940年（昭和15年）に換地処分された「大阪市片江中川土地区画整理事業」によって生まれた街である。「国防博」の行われた1934年（昭和9年）の段階では、まだ北西部のみが街の体裁を整えただけで、それ以外は従来のままの区画が残り広大な空き地になっていたと思われる。その土地を利用して「国防博」が開催されたと考えるのが自然である。

まず、資料1に記載されている「丁」を距離の単位を表すと仮定し特定を試みた。

「丁」は、1891年（明治24年）以降一丁109.09メートルと定められている。「丁」が切り捨て表示であった可能性も考え、大軌今里（現在の近鉄奈良線今里駅）からは半径二丁と三丁の、市電今里（現在の大阪メトロ今里駅付近）からは半径三丁と四丁の同心円をそれぞれ描いてみた。しかしながら、両駅からの同心円の重なりが、両駅いずれもの南側になければならないという大前提を満たすことはできなかった。（図1・図2）

次に資料2に記載された会場の形状に着目した。

手書きで文字は稚拙、誤字もある。更に市電と大軌電車の位置関係が逆になるなど、極めて正確さに欠ける図である。しかしながら、凹凸のある形状は特徴的で偶然や適当とは思えない。そこで当時の今里新地周辺の空き地とこの形状が合致する場所を1932年（昭和7年）の地図で探してみることにした。

すると、大軌今里駅の約200メートル南に、会場の形状と当時の道路がぴったりとはまる区画が見つかった。そのままだと面積は約1万8千坪と狭いが、資料1の「大軌今里停留所南へ二丁」の記述には完全に一致する。



正門があったと推定される新今里五丁目の交差点付近

昭和九年四月一日至五月二十日 十五日開

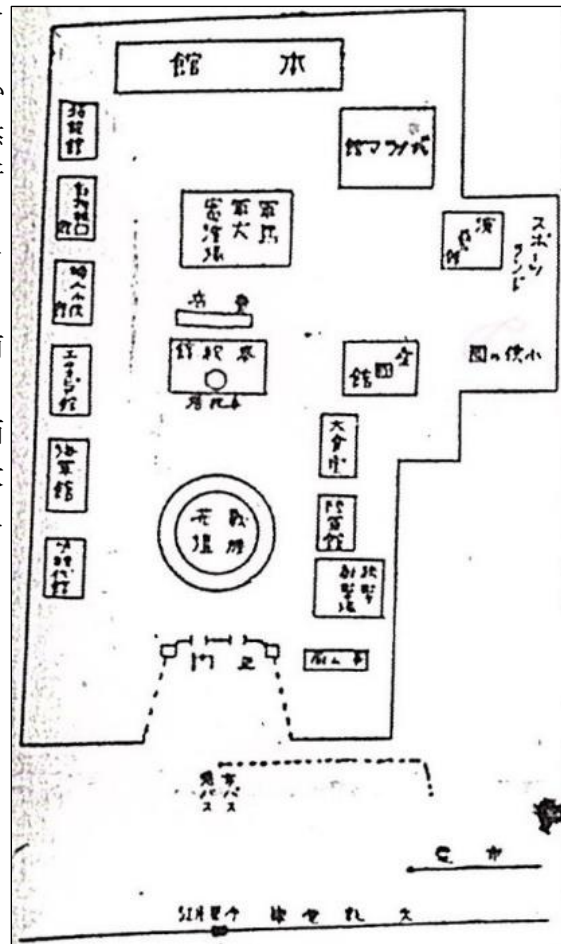
主催 大阪時事新報社・愛国協

会場 大阪市今里 大軌今里停留所南へ二丁

入場料 一般大人三千銭・軍人・小人千五百銭

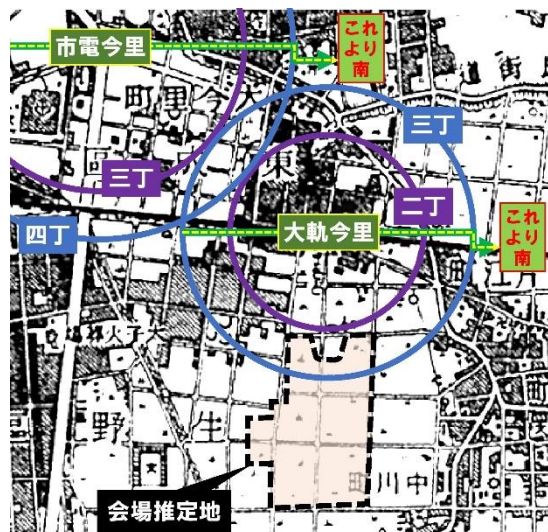
（圖）地圖参照あり

[資料1]1934年（昭和9年）4月1日付朝刊「大阪朝日新聞」広告抜粋



[資料2]1934年（昭和9年）4月1日付朝刊「大阪時事新報」会場見取図

なお、面積が狭くなっているのは、西の張り出し部分に存在していた第二会場が実際より狭小に描かれていることが要因と考えられる。演芸館は2百坪であるが、子供の国は5千坪、スポーツランドは3千坪もあり、メインの第一会場・第二会場を合わせると3万坪程度となる。(別にある第三会場は2万坪あるので合わせた会場面積は5万坪である)



[図 1] 国土地理院「大阪東南部・2万5千分の1」1932年部修(1947)



[図 2] OpenStreetMap (2019)

これらのことから、この生野区新今里三丁目から七丁目に位置するこの場所が、現在考え得る最も可能性が高い“会場推定地”と判断した。(図1・2「会場推定地」)

ただ、現地を訪れてみても、当時とは区画が変わってしまったこともあり、その遺構を見つけることはできなかった。残念ながら確証までは得られなかったのである。

4. 正しい開催期間について

前述のとおり、「国防博」の開催期間は、1934年(昭和9年)4月1日(日)から6月10日(日)までである。ところが、各種文献の記載は全てと言っていいほど「5月20日(日)」までとなっている。これは開催前から5月中旬まで示されていた閉幕日である。「6月10日(日)」までの会期の延長は、「大阪時事新報」5月18日付朝刊で公表されている。

5. 今後について

このように、「国防博」の会場について推定までは行えたものの断定には至らなかった。今里新地の1930年(昭和5年)から1940年(昭和15年)までを記した『今里新地十年史』には、1936年(昭和11年)に甲子園で開催された「輝く日本博覧会」のことは触れられていても、地元で行われた「国防博」についての記述はないなど、不思議な点も残されている。

引き続き調査を続け「国防博」の全貌を明らかにしていきたい。

◆参考文献等

- 湯原公浩編『別冊太陽 日本のこころ 133 日本の博覧会 寺下勅コレクション』(2005) 平凡社、『大阪の博覧会』展』(1998) 大阪府立中之島図書館、南博編『近代庶民生活史 第13巻』(1992) 三一書房、『大阪朝日新聞縮刷版 昭和九年五月號』(1934)、『大阪時事新報昭和9年3~6月』(1934) Web (2019/02/28 アクセス)
 乃村工藝社博覧会資料<<https://www.nomurakougei.co.jp/expo/>>、大阪市都市整備局土地区画整理事業等の換地確定図【生野区の地図】<http://www.city.osaka.lg.jp/contents/wdu160/web-content/sonota/kubunzu_ikunoku.html>、神戸大学附属図書館「デジタルアーカイブ新聞記事文庫」<<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sinbun/snlist/2701.html>>

「大阪の万博」と鉄道

前阪 恵造

【目的】

明治5年、官営鉄道 新橋-横浜間開業から2年、大阪-神戸間開業、大阪でも鉄道の運行が始まった。当時、鉄道は文明開化の象徴であった。鉄道はその後、目覚ましい発展を遂げ、単なる旅の手段だけではなく、「人と人、人と物の交流」の機会を爆発的に拡大させ、都市の発展や地域産業の近代化にとって不可欠な存在となった。

本研究は鉄道と街の発展の経緯を、博覧会を通して振り返り、2025年大阪で開かれる国際万国博覧会に向け、鉄道や公共交通機関のあり方について提言する。

【内容】

明治期に開催された内国勸業博覧会は国内の産業発展を促進し、魅力ある輸出品目育成を目的として、東京(上野)で3回、京都・大阪で各1回(計5回)政府主導で開催された。最後の開催となった第5回内国勸業博覧会が1904(明治36)年、大阪で開催。日本が工業所有権の保護に関するパリ条約に加盟したことで海外からの出品が可能となり、14か国18地域が参加した国際博となった。この博覧会では会場のアクセスとして南海鉄道、関西鉄道が臨時駅を開設、関西鉄道は展示館まで仮線路を施設、展示車両を引込んだ。鉄道網の発達もあり、過去最高の435万人の入場者を集めた。

昭和45年、大阪で開催された日本万国博覧会では、会場アクセスとして地下鉄の江坂延伸に加え、江坂から会場まで結ぶ第三セクター新線、北大阪急行が開業、阪急千里線に臨時駅が開設され、来場者6,421万人の内、3,300万人を超える入場者が鉄道を利用した。この頃、近鉄の難波延伸、新幹線の16両編成化や臨時列車の増発等が行われと共に大阪市電・トロリーバスの廃止や御堂筋等の市内の幹線道路の一方通行化など、鉄道ネットワークの形成や交通機関整備、市街地整備に大きな影響を与えた。

2025 大阪・関西万博では、地下鉄中央線の夢洲延伸を軸とし、主要駅からシャトルバスを運行する形で、アクセス計画がなされている。

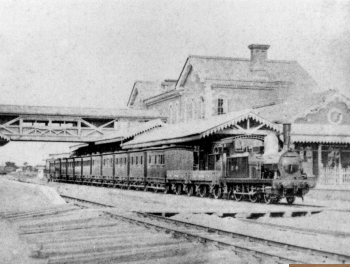
博覧会に求められるものとして未来への技術や社会へ提案がある。1962年から始まったリニアモーターカーの開発は1970年の大阪万博、日本館で展示を経て、65年の時を経て品川-名古屋間2027年開業を目指して建設が進められている。2025年大阪・関西万博でも、未来への新たな挑戦が求められている。

【結果】

- ・明治期の博覧会に登場した電車、多くの入場者を集めた鉄道網の発達と臨時駅。
- ・「大阪の万博」を支えた鉄道輸送とその後の都市交通の変化。
- ・2025 大阪・関西万博に向けて鉄道、博覧会に求められるもの。

はじめに

明治5年、官営鉄道 新橋-横浜間開業から2年、大阪-神戸間開業、大阪でも鉄道の運行が始まった。
 当時、鉄道は文明開化の象徴。→鉄道の発達は「人と人、人と物の交流」を爆発的に拡大した。



出典「古写真なわ風景」



「梅田停車場跡」顕彰碑 梅三小路

本研究は、過去に開かれた博覧会を通して鉄道と街の発展の経緯を振り返ると共に、2025年大阪で開かれる国際万国博覧会、また、未来の公共交通について提言したい。

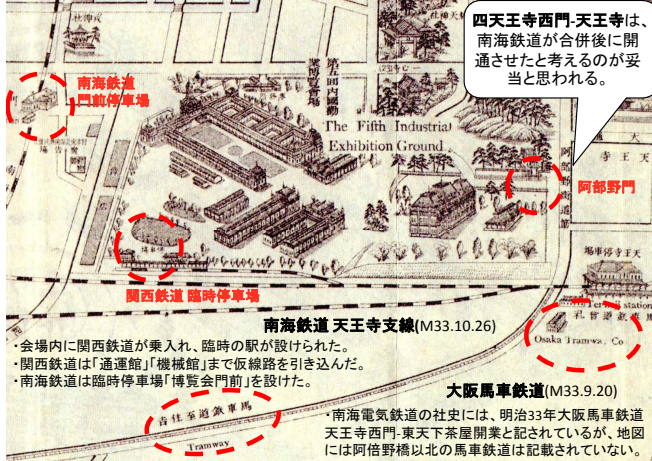
内国勧業博覧会

明治時代の日本で開催された博覧会である。国内の産業発展を促進し、魅力ある輸出品目育成を目的として、東京(上野)で3回、京都・大阪で各1回(計5回)政府主導で開催された。最後の開催となった内国勧業博覧会が、1904(明治36)年、天王寺と堺で開催。日本が工業所有権の保護に関するパリ条約に加盟したことから海外からの出品が可能となり、14か国18地域が参加した国際博となった。

	会期(日数)	会場	敷地面積(坪)	会場建坪(坪)	入場者数	出品人数	出品点数	褒賞数	経費(円)
第1回	1877年(明治10年)8月21日-11月30日(102)		29,807	3,013	454,168	16,147	14,455	4,321	122,410
第2回	1881年(明治14年)3月1日-6月30日(122)	東京・上野公園	43,300	7,563	822,395	31,239	85,366	4,031	276,350
第3回	1890年(明治23年)4月1日-7月31日(122)		40,000	9,569	1,023,693	77,432	167,066	16,119	566,500
第4回	1895年(明治28年)4月1日-7月31日(122)	京都・岡崎公園	50,558	8,744	1,136,693	73,781	169,098	17,729	443,303
第5回	1903年(明治36年)3月1日-7月31日(153)	大阪・天王寺宮	114,017	16,506	4,350,693	130,416	276,719	36,487	1,093,973

第1回-第5回内国博の諸数値 (出典: Wikipedia、国立国会図書館)

「第五回内国勧業博覧会観覧必携 大阪全図」明治36年発行

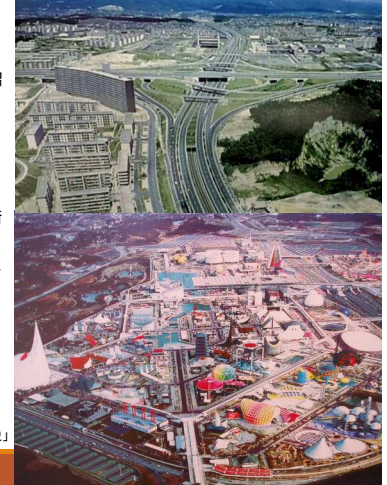


四天王寺西門・天王寺は、南海鉄道が合併後に開通させたと考えるのが妥当と思われる。

- ・会場内に関西鉄道が乗入れ、臨時の駅が設けられた。
 - ・関西鉄道は「通運館」「機械館」まで仮線路を引き込んだ。
 - ・南海鉄道は臨時停車場「博覧会門前」を設けた。
- 南海鉄道 天王寺支線(M33.10.26)
 大阪馬車鉄道(M33.9.20)
 南海電気鉄道の社史には、明治33年大阪馬車鉄道天王寺西門-東天下茶屋開業と記されているが、地図には阿倍野橋以北の馬車鉄道は記載されていない。

大阪万博の交通

1965(昭和40)年の9月14日、日本万国博覧会の開催決定、翌「財団法人日本万国博覧会協会」設立され、1970(昭和45)年3月15日の開催まで(実質4年間)に必要な設備を整えることが定められ、その一つとして交通機関の整備も上げられた。
 また、都市インフラもこれを機に一気に整備しようと言うことになり、直接は関係しないところでも交通機関整備・市街地再開発などが推し進められることになった。
 また、東海道新幹線の16両化、大阪市電の廃止、大阪市営トロリーバスの廃止、御堂筋をはじめとする幹線道路の一方通行化、近畿日本鉄道難波延伸の開業がおこなわれたのも、大阪万博が契機であった。



写真出典「北大阪急行25年史」

会期中の来場者当初延べ5,000万人⇒6,421万8,770人
 約2/3の3,000万人は鉄道利用が見込まれた
 会場の千里丘陵と大阪を結ぶ新たな鉄道アクセスの整備

↓
大阪市と阪急に会場アクセス新線を打診

大阪市 江坂までの延伸は計画されていたが、延伸時期は1971年以降大阪市外への延伸には消極的。会期後の乗客減にも憂慮

京阪神急行電鉄 千里山線の延伸(地下鉄堺筋線乗入れ)、臨時駅の開設で充分新線には消極的。

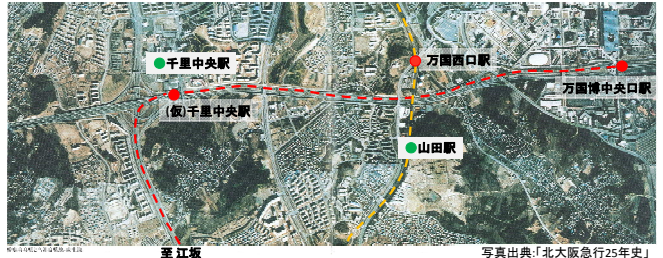
↓
北大阪急行電鉄

1967年6月28日運輸大臣、通産大臣兼万博担当大臣、大阪府知事、大阪市長および京阪神急行電鉄社長の五者会談で政府、府、市などの強力な援助のもとに阪急を主体とする新しい鉄道会社、**北大阪急行電鉄**が**第三セクター(阪急50%、大阪府25%、大阪ガス5%、金融機関5社×4%)**で設立。

北大阪急行電鉄 会場線・南北線(千里中央-万国博中央口 3.6km)

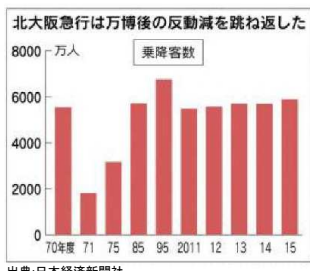
北大阪急行は、御堂筋線の終点、江坂駅から北にまっすぐ伸びて、千里中央駅に至る5.9kmの路線であるが、当時は会場を結ぶため、中国自動車道の手前で東にカーブし、中国自動車道の上線を通り、万博会場に至る長さ3.6kmの会場線がありました。会場線の路線免許は開幕日の翌々日を以て失効するとされており、万博輸送のためにだけ存在した路線です。会期中に2400万人を輸送。

阪急千里線 南千里-北千里間に、1969(S44)11月10日から1970年9月14日まで南千里駅と北千里駅の間に臨時駅の「万国博西口駅」(南千里駅から2.2km地点)を設置して輸送に備えた。会期中900万人を輸送。(北急2400+阪急900=3300万人)



江坂

写真出典「北大阪急行25年史」



初乗り運賃のきっぷを購入するために千里中央駅に出かけました。私にとっては決して安いきっぷではありません。



北大阪急行電鉄の1970年度(昭和45年)の乗降客数は4,148万人で、無事に大役を果たした。

翌年から、大幅な乗客数の減少で、北大阪急行電鉄の事業収支は赤字となった。

昭和46年から4年間連続の赤字

その後、沿線の住宅開発や千里ニュータウンの成熟、不動産事業の参画により、利用者の増加や事業収入の増加により、経営は安定した。

初乗り運賃100円、日本最安
2020年度、千里中央-箕面萱野間が開業予定

大阪万博 会場内アクセスモノレール

大阪万博会場内の各パビリオンを繋ぐ環状路線として建設。路線延長4.274km、全線単線で、片方向反時計回りの運行によって大阪万博会場内を一周。停車時間を含む、一周所要時間約15分。

ATO(自動運転方式)が採用され、世界初の実用運転となった。会期中、大量の人員を円滑に輸送するという使命を全うした。車両デザインは、キッコーマンの醤油瓶をデザインした榮久庵憲司による。

閉会后、廃止されたが、この成功を機にモノレールが都市交通機関として飛躍的に発展していく事となり、その後、日本国内では大阪モノレール(大阪高速鉄道)を含む、5路線の日本跨座型モノレールが開業した。



写真、図出典 - Monorail of EXPO '70 - 大阪万博モノレール

大阪万博 会場の足

動く歩道

踏み面が階段状にならない水平型エスカレーターの通称。オートウォーク、ムービングウォーク、トラベレーター、ムービングサイドウォークとも呼ばれているが日本では、大阪万博以降、「動く歩道」という呼び方が定着している。また、大阪万博の開催後、日本各地で「動く歩道」が採用されている。

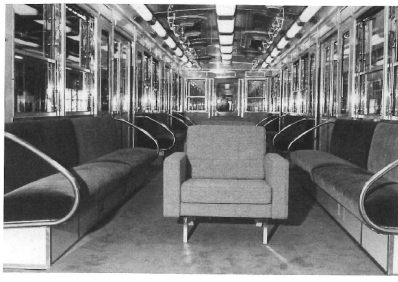
総延長:3516m
最大延長物:187.5m
方式:チューブ状高架式(冷房完備、地上4-5m、ただし露出型、一方運転のものも存在)速度:2.4km/h

日本で最初に「動く歩道」を採用したのは、1967(昭和42)年、阪急梅田駅で大阪駅の北側に移転拡張された際に設置された(阪急電鉄はこの動く歩道を「ムービングウォーク」と呼んでいる。

写真出典上「備光硝子 日本万国博覧会」下「大阪万博」



会期中、道路事情が悪化した場合に備えて50系のうち4両を**貴賓車**として改造したが、実際には使用されなかった。尚、貴賓車として用意された車両は廃車されたが、50系車両が森ノ宮検車場に保存されている。



ページュ色のじゅうたんを敷いた通路部分に射掛いす5脚を並べた5000形万博VIP用貴賓車5018号車内(写真左)と外観(写真右)。正面の車室台座を小型に改造後の5000-5500形としては唯一御室筋線を走ったものでもある。なお方向幕と連絡器下部に見える棒状のものは誘導無格のアシナである。写真2枚所載: 大阪市交通局 出典「万博前夜の大阪市営地下鉄」

大阪万博の鉄道遺跡

万博閉会に伴い北大阪急行電鉄の会場線は廃止されたが、地下部分のトンネルは現在も残されている。(非公開)

桃山台にある北大阪急行車両基地には、当時の車両が保管されており、イベント開催時には公開されている。



写真出典「産業遺産JAPAN」

幻に終わった千里線延伸計画

京阪神急行電鉄は、千里山線を延伸し、新千里山(南千里)から、箕面線桜井駅に至るルートを描いていた。

現在の千里中央の北側あたりを通る延伸計画線が阪急電鉄「75年のあゆみ」に残されている。

その後、千里山の延伸計画が北千里となったことで、計画は見直され、北千里駅は箕面方面へ延伸を考慮した構造となり、大阪府により北千里駅より北の千里ニュータウン内に用地が確保されていた。

この延伸計画は北大阪急行電鉄の開業により、事実上中止となり、大阪府が確保した用地が北千里駅から北に細長い形状に残されている。



北千里駅の留置線



資料: 阪急電鉄「75年のあゆみ(記述編)」(同社、1982年)66ページ。

大阪の万博と大阪のタワー

村田 幸雄

【目的】

2025年の大阪・関西万博開催が決まり1970年に開催された大阪万博（EXPO'70）が再び注目されている。EXPO'70では個性的なデザインの建築物が数多く出展されたが、私には、太陽の塔やエキスポタワー、東大寺五重塔などのタワーが強く印象に残っている。一方現在の大阪には、四天王寺五重塔や通天閣など大阪の歴史と関係深いタワーや、日本一高いビル・あべのハルカスや、世界の20建築物に選ばれた梅田スカイビルなど、魅力的なタワービル（超高層ビル）が多くある。そこで、大阪万博のタワーを切り口に、大阪のタワーを紹介したい。

【内容】

○世界の万国博覧会とタワーの歴史

1889年パリ万博でエッフェル塔が大人気を得た。1900年パリ万博で日本の五重塔が登場。1993年ニューヨーク万博のトライロン(明日の世界)、1958年ブリュッセル万博のアトミウム(原子力の平和利用)、1962年シアトル万博のスペースニードル(未来都市のモデル)など万博のテーマを表現するシンボルとしてのタワーが出現した。

○大阪万博(EXPO'70)のタワーと大阪のタワー

エキスポタワーと梅田スカイビル、太陽の塔とPL教団大平和祈念塔、古河パビリオン東大寺七重塔と四天王寺五重塔、タイ館・ネパール館と大阪仏舎利塔、空中ビュッフェとえびすタワー。

○万博前史としての大阪の博覧会のタワー

第5回内国勸業博覧会の大林高塔と大林組、その後の大林組のタワー建設実績。

○地域開発の先駆けとして超高層ビル

2025年万博開催の地・夢洲開発の先駆けとなる大阪メトロ夢洲駅タワービル。
1970年大阪万博でJR大阪駅前整備の際の大阪駅前ビル。他に京橋の大阪砲兵工場跡の再開発時のOBPツインビル、弁天町再開発時のORC200、大阪臨海部の開発時のコスモタワー（WTCタワー）等。

○現在の大阪の超高層ビルについて

○2025年大阪・関西万博開催に向けて

【結果】

大阪には、ここで取り上げたタワーの他に魅力的なタワーがまだまだ多くある。又タワーの魅力であるタワーから見た大阪の風景も面白いテーマである。これらについては今後の課題としたい。

1 はじめに

1970年の大阪万博では、個性的なデザインの建築物が多く見られたが、私にはエキスポタワー、太陽の塔、古河パビリオンの東大寺七重塔などのタワーが深く印象に残っている。一方、大阪には四天王寺の五重塔、通天閣など大阪の歴史と関係深いタワーやあべのハルカス、梅田スカイビルなど魅力的なタワービル(超高層ビル)がたくさんある。そこで大阪万博のタワーを切り口に大阪のタワーを以下で紹介したい。

2 世界の万国博覧会とタワー

最初に世界の万博とタワーの歴史を振り返ってみたい。万博のシンボルモニュメントとして初めてタワーが登場したのは、1889年のパリ万博の**エッフェル塔**である。世界初の万博であった1851年のロンドン万博のシンボルモニュメントの鉄とガラスで造られた水晶宮に対抗して建設された。高さ300mの高くそびえ立つ鉄骨のタワーは、建設当初は賛否両論あったが、万博開催後は大人気を博した。

1893年のシカゴ万博では、パリ万博のエッフェル塔に対抗して世界最大の観覧車が登場した。高さ81mで世界初の**電動式観覧車**であった。以降万博での観覧車を必須アイテムにした。

1900年のパリ万博では、日本の五重塔が登場した。「世界の塔」という企画でインドの寺院、中国の宮殿、アラブのモスク、カンボジアのアンコールワット等と一緒に出展された。この塔は、後にベルギーが買い取り、現在もブリュッセルのラーケン公園に設置されている。

1939年のニューヨーク万博では、万博のテーマを表現するシンボルとしてのタワーが登場した。**トライロン**と呼ばれた212mの尖塔とペリスフィアと呼ばれた直径65mの球体の二つの抽象造形が「理性的な明日の世界」を表現した。ちなみに、この年にナチスドイツがポーランドに侵攻している。

1958年のブリュッセル万博では、直径18mの球体9つをチューブでつないだ高さ103mの**タワー・アトミウム**が出現した。鉄の結晶をモチーフにし、原子を象徴していた。米ソの対立と核の脅威を背景に、「原子力の平和利用」を表現した。

1962年のシアトル万博では、高さ185mの回転展望台・**スペースニードル**が出現した。米ソの宇宙開発競争の激化という時代背景の下、「未来都市のモデル」を表現した。

このようにタワーが単なる高さ比でなく、万博のテーマを表現するシンボルとしての役割を果たすようになった。

3 大阪万博(EXPO'70)のタワーと大阪のタワー

ここでは、大阪万博のタワーを切り口に、現在大阪のタワーを紹介したい。

エキスポタワーは大阪万博のランドマークタワーであった。建築家・菊竹清訓の設計で、ユニットを組み合わせれば空中でも生活可能な空中都市を提案している。建築を変化・進歩する有機体と捉えるメタボリズムの考えを表現している。

現在の大阪にもこの空中都市をコンセプトにしたタワービルが存在する。1993年に原広司が設計し、完成した**梅田スカイビル**である。連結超高層という形式で、空中で隣のビルと行き来出来るようになっている。又、頂上にある空中庭園は、大阪万博のお祭り広場の屋根と同じリストアップ工法で建設されており、大阪万博での建築技術が活用されている。この梅田スカイビルは、英国の雑誌で世界の20建築物に選ばれ、外国人観光客の人気を博している。

太陽の塔は規格外の芸術家・岡本太郎のデザインになる。大地から生まれた生命力、根源的な人間の姿を表現していると言われている。作者の岡本太郎は「ベラボーナもの」と表現している。この太陽の塔は、最初の構想では、小ぶりの塔が五本立っていて、五つの彩りで五大州を表現していた。その後何度も修正され最終的に巨大な一つの塔で建設された。又、太陽の塔の横には「母の塔」と「青春の塔」の二つの塔があった。母の塔は大屋根

内部の展示場からの下りエスカレーターと一体になった造形物で、温かい母性を表現していた。青春の塔は、魚、玉、深海魚、飛行機、人間、オバケの六つの造形物で造られていて若々しい祭りの喜びと青春のエネルギーを象徴していた。

太陽の塔と同じく、建築家以外の人物がデザインした塔として、富田林市にある PL 教団の**大平和記念塔**がある。高さ180m で、太陽の塔と同じ昭和45年に建設された。元々は華道草月流の創始者である勅使原蒼風が「生命の塔」としてデザインしたが、複雑すぎて建築できないとして、御木徳近・二代目教祖が自らデザインし、建設された。

古河パビリオンの東大寺七重塔は、日本の古代文化・東西交流の象徴として再建された。日本の仏塔の美しさと、スケールの大きさを世に示した。鉄筋コンクリート造りで高さが86mであった。764年に完成し、1180年に平重衡の兵火で焼失した東大寺の東塔を再現したものである。東大寺七重塔は万博終了後、東大寺へ移築する案もあったが、費用がかかりすぎるとして、相輪のみ、大仏殿横の空き地に移築された。

この東大寺七重塔と同じ鉄筋コンクリート造りの塔が**四天王寺の五重塔**である。先代の五重塔が再建後わずか5年で、大阪空襲で焼失した。その反省から鉄筋コンクリート耐震構造で1959年に再建された。

四天王寺五重塔の初代の塔は、593年聖徳太子が建立したと伝えられている。建立から現在まで1400年間の内1200年間、8代の塔が上町台地のランドマークとして立ち続けていることになる。(補足資料参考)

タイ館、ネパール館は仏舎利塔をデザインしたパビリオンである。タイ館は尖塔型のストゥーパ(卒塔婆)、ネパール館は覆鉢型ストゥーパの寺院を模している。釈迦が没した後、インドに遺骨(仏舎利)を祀るためにストゥーパが造られた。仏教がインドから各地に伝えられるとともに、各地で独自の形態のストゥーパが生まれた。日本の仏塔もストゥーパの進化した形態である。大阪万博ではいろいろな形態の進化したストゥーパを見ることが出来た。

寝屋川市にある**大阪仏舎利塔**は、ネパール館と同じ覆鉢型のストゥーパである。大阪の婦人活動家・川島貞子が昭和38年に建立したもので、インドのネール首相から贈られた真の仏舎利が祀られている。

万博会場内5カ所に設置された**空中ビュッフェ**は、サンドイッチやカレーライス等の食事もとれる空中観覧車として人気を博した。自転しながら楕円型に一週 20 分(高さ31m)で昇降した。

空中ビュッフェと同じ楕円型の観覧車が、道頓堀のドンキホーテの**えびすタワー**である。一時営業停止していたが、外国人観光客が増え、平成28年に再開。一週15分、高さ77mの日本で唯一の楕円型観覧車である。

4 万博前史としての大阪の博覧会のタワー

明治の後半から大阪でも博覧会が開催されるようになり、ランドマークとしてタワーが建設された。

第 5 回内国勸業博覧会(明治36)の**望遠楼(大林高塔)**は、大林組の創業者・大林芳五郎が「大阪平野のみごとな景観を世に知らしめたい」として建設した。木製で高さ45m、大阪で初めてエレベータを備え付けたタワーであった。その後大阪で開かれた博覧会でも、大大阪記念博覧会(大正14)の**暁鐘塔**や電気博覧会(大正15)の**水晶塔**と**高塔**などのタワーが出現した。電気博覧会の高塔は、報告書によれば、高さが90mで、「淡路島、瀬戸内海、生駒連山、紀泉の諸峰が見渡せた」としている。

第 5 回内国勸業博覧会で大林高塔を建設した大林組は、その後タワー建設の分野で多くの実績を上げている。明治45年(1912)新世界に初代通天閣、昭和6年(1931)に大阪城天守閣、昭和34年(1959)に四天王寺五重塔、昭和38年(1963)に神戸ポートタワー、昭和39年(1964)に京都タワービルそして平成24年(2012)には東京スカイツリーを建設した。

5 大阪の地域開発の先駆けとしてのランドマークタワービル

2025年の大阪・関西万博が開催される夢洲に、夢洲開発の先駆けとして、大阪メトロが高さ250m、50階建て

の**夢洲駅タワービル**建設計画を発表した。1970年の大阪万博の際には、闇市の名残が残る大阪駅前の再開発として**大阪駅前第1ビル**が建設された。その後大阪駅前ビルは第4ビルまで建設され、大阪駅前を一新した。

他にも、大阪の地域開発の先駆けとなったランドマークタワービルがある。**OBP ツインビル**(高さ157m)は、京橋の砲兵工廠跡を再開発した大阪ビジネスパークのランドマークタワービルとして昭和61年(1986)に建設された。日本で初めてのツインタワービルであった。**ORC200**は、弁天町を梅田、難波、阿倍野に次ぐ副都心にする計画のランドマークタワーとして建設された。ORC200は大阪リゾートシティの200m級の高層ビルの意味である。ORC200はバブル崩壊で困難な時期を経て、現在はアートホテル大阪ベイタワーとして利用されている。**コスモタワー(WTC タワー)**(高さ256m)は、大阪臨海部開発の拠点として建設された。幾多の変遷をへて、現在は、大阪府咲洲庁舎として活用されている。

6 大阪の超高層ビルの高さ比較

昭和36年の特定街区制度の制定や昭和38年の建築基準法改正で高さ制限が撤廃され、31mを超える高層ビルが建設されるようになった。昭和43年、東京の霞が関ビル(147m)に続き、大阪でも昭和48年に大阪大林ビル(119m)が建設された。平成5年から8年にかけて、**ORC200**(高さ200m)や**WTC コスモタワー**(高さ256m)、**りんくうゲートタワー**(高さ256m)等が建設された。平成21年建設の北浜タワー(209m)は現在日本一高いタワーマンションで、平成26年建設のあべのハルカス(300m)は日本一高い高層ビルである。(添付資料参考)

○大阪の超高層ビルの高さ比較(2019年3月末現在)

	名称	高さ		完成年	所在地	備考
1	あべのハルカス	300m	60階	平26(2014)	阿倍野区	高さ日本1
2	りんくうゲートタワービル	256.1m	56階	平8(1996)	泉佐野市	高さ日本3
3	コスモタワー(WTCタワー)	256.0m	55階	平7(1995)	住之江区	高さ日本4
4	北浜タワー	209m	54階	平21(2009)	中央区	マンションで高さ日本1
5	クロスタワー大阪ベイ	200.4m	54階	平18(2006)	港区	
6	大阪ベイタワー(ORC200)	200.0m	51階	平5(1993)	港区	
7	中之島フェスティバルタワーウエスト	199.3m	41階	平29(2017)	北区	
8	中之島フェスティバルタワー	199.0m	39階	平24(2012)	北区	
9	関電ビルディング	196m	41階	平16(2004)	北区	
10	ザ・パークハウス中之島タワー	193m	55階	平29(2017)	北区	

7 2025年大阪・関西万博開催に向けて

かつて大阪で開催された万博では、エキスポタワー(EXPO'70)やいのちの塔(EXPO'90)のような展望台のあるランドマークタワーが存在した。2025年の大阪・関西万博ではこのようなランドマークタワーは建設されないようである。高所から会場全体を見下ろすのは万博見物の醍醐味でもある。そこで、夢洲タワービルの上層階に、万博開催期南中は、誰でも利用できる展望スペースの設置を提案したい。又、現在の大阪府咲洲庁舎の展望台からは夢洲の全景を望むことが出来る。統合型リゾート関係の建築物や万博のパビリオンが建設され変化する夢洲を見るのにお薦めの場所である。

(参考文献)

ニッポンの塔 橋爪紳也 河出書房新社 タワー・ランドマークから紐解く地域文化 津川康雄 ミネルヴァ書房

四天王寺史料 棚橋 利光/編 清文堂出版 図説万博の歴史 平野暁臣 小学館

国際博覧会歴史事典 平野暁臣 内山工房 太陽の塔新発見 平野暁臣 青春出版社

21世紀への創造 大阪建設業協会 大阪建設業協会

(参考資料)

○四天王寺五重塔の歴史

飛鳥・奈良時代	593	初代	四天王寺創建 難波津外国船の目印	江戸時代	1623	5代目	徳川秀忠再建
平安時代	836	2代目	雷火		1801		雷火
	?		火災	明治・大正 昭和	1812	6代目	紙屑問屋・淡路屋太郎兵衛
	960	1934			室戸台風 春団治・鷹治郎		
鎌倉・室町・戦国	?~1143	3代目	織田信長軍の砲火	昭和・平成	1940	7代目	大阪空襲
	1576	4代目			1945		
江戸時代	1600		大和額安寺の塔を移築		大坂冬の陣	1959	8代目
	1614	耐震構造					

○大阪で一番高いビルの推移

完成年月	名称	高さ		所在地
昭44(1969).8	OMMビル	80m	22階	中央区大手筋
昭48(1973).1	大阪大林ビル	119m	30階	中央区北浜東
昭48(1973).2	大阪国際ビルディング	125m	32階	中央区安土町
昭50(1975).2	中之島センタービル	129m	31階	北区中之島
昭54(1979).9	大阪駅前第三ビル	142m	34階	北区梅田
昭61(1986).3	ツイン21	157m	38階	中央区城見
平4(1992).10	アブローズタワー	161m	34階	北区茶屋町
平5(1993).2	ORC200	200m	51階	港区弁天町
平7(1995).2	コスモタワー (WTCタワー)	256m	55階	住之江区南港北
平8(1996).8	りんくうゲートタワービル	256.1m	56階	泉佐野市
平26(2014).3	あべのハルカス	300m	60階	阿倍野区阿倍野筋

○咲洲庁舎展望台から見た夢洲の現状



【研究のねらい】

1970年の大阪万国博覧会開催に向け、大阪の都市部も急速な都市再開発がなされた。それは、戦争で都心部の多くが消失している中で、戦禍を免れた都心部の再開発と戦後の混乱期に作られた闇市跡のバラックなどのクリアウエイを含み都市のジェントリフィケーションが実施され計画的な新たな都市の設計であった。谷町6丁目交差点から天王寺警察署西交差点までの区間(市電の未通過区間)1.9kmの谷町筋の拡張工事を大阪万国博覧会(EXP070)の開催に合わせて実施し、現在の谷町筋の完成をしたことに伴い、周辺の住環境の変化と文化的な資産への影響を考察することによって、国際的大型イベントの実施に伴う、都市のジェントリフィケーションとクリアウエイについて検討を加える。

谷町筋について

府道30号線(大阪和泉南線)の一部、土佐堀通りと交差する中央区天満橋交差点から天王寺区・阿倍野区近鉄前交差点までの4.7キロメートルを指す。片側3車線の6車線道路で大阪市内中心部上町台地を南北に通過する。天満橋交差点を跨いで天満橋の上をオーバーパス、長堀通り(谷六交差点)千日前通り(谷九交差点)でアンバーパスがあり、地下を大阪メトロ谷町線が通る。

谷町6丁目から8丁目の幅員拡張

昭和32年の市内地図を見ると、当該区域のうち既に幅員の拡張は谷町9丁目付近梅ヶ辻から南の部分は既に整備が完了している。幅員拡大と市街地改造事業は昭和36年6月に公布施行された「公共施設の整備に関連する市街地の改造に関する法律」に基づき、道路等の公共施設の他建設敷地及び建築物を総合的に整備し、土地の高度利用及び都市の不燃化をはかり、都市計画見地的地から健全な市街地に改造しようとするものである。これに基づいて谷町地域5.84haが、昭和38年～44年の7か年の計画で96億円(当時)の予算で市街地改造されることになった。主には都市計画道路(谷町筋)の幅員を40メートルに道路整備し道の両側に高層建物を建築し、都市機能の増進を図るものであった。しかしながら当該地区には金属機械関係の間屋が多く、当初計画された幅員拡大に合わせて高層建物15棟の建設計画は思うように進まなかった。

火急的課題は地下鉄 2 号線（谷町線）の延伸問題であった

地下鉄 1 号線のバイパスとして計画されていたが、谷町 6 丁目 7 丁目と戦災で焼け残った家が密集しており道路が幅員 6 メートルであるため地下鉄を掘ることが困難であった。大阪市計画局は市街地改造事業を進めていたが、当該地区の道路沿いには機械工具商が多く、道路幅員を 40 メートルに広げ両側に谷六交差点付近は 8 階から 6 階建てのビルをその他は 4 階建てビルを建設し立ち退き家屋を収納させる計画であったが、重い機械や金属工具を扱う業者を計画的に設計建設された高層建物へ移転させる交渉は難航した。地権者は幅員拡張による建替は自らで実施したいという要望が強かった。駅は既に開業している 1 号線（御堂筋線心斎橋駅）、3 号線（四ツ橋筋線四ツ橋駅）にあわせ谷町 6 丁目交差点南に置かざる得ないため、先行して駅部分の工事を進める必要性があった。そのために計画局は一部計画を変更し、谷六交差点付近の建物は立ち退くが新築ビルは民間に任せることにしたため大小さまざまなビルが建つことになった。このため開通は 1 年延びた。

谷町六丁目駅予定地から以南の交渉

谷町 6 丁目駅予定地は先行して土地収用が進められたが、妥協点として、建替え建築物は民間所有者に任せることとなった。以南の土地収用の交渉は難航したために、地下シールド工法で収用前の民家の下で地下鉄開通工事を先行させる合意が先になされた。「南区がごねたために地下鉄開通が遅れ万国博覧会開催に支障が出ては大阪市全体に申し訳ない」というコンセンサスで地域をまとめた地元有力者が存在した。地下鉄のシールド工法工事と並行して土地収用が進み幅員の拡張と周辺の建替え建物建設と入居が進んだ。

法妙寺の移転と近松門左衛門の墓

谷町 8 丁目にあった法妙寺は谷町筋の幅員拡張のために寺を大東市寺川へ移転することを計画した。しかしながら昭和 41 年に境内の墓地にあった近松門左衛門の墓が国の史跡に指定されたために仮に寺と一緒に移転した場合は史跡の指定が外れるため大阪市が寺側に、墓だけ残し移転することを希望したためにそれに応じた。墓の保存については住吉名勝保存会が尽力し特に当時の理事長高野光男氏が大阪市議会議員をしていたこともあり市側と寺側の調整を図り現在の形となった。

まとめ

大阪万国博覧会の開催を目標に大阪市内の再開発整備が行われた。主に戦禍を受けた市内地域の再生と、戦争被害の少ない都心部の低開発地区を計画的整備しようとした。当該地区の住民の意思を尊重した調整は図られた経緯はあるが、それは経済的な側面と個々の権利を重視したものであった。昭和40年代初頭の高度経済成長期において重視されているのは経済的な発展であり、そのことがもたらす正の部分だけを評価し、現在でいう環境面のアセスメントや文化的な背景については検討された経緯は見当たらなかった。

ニューヨークの高速道路反対運動でジェイン・ジェイコブスが議長になったのが1962年。その後『アメリカ大都市の死と生』が書かれるが翻訳本が日本で紹介されたのは1969年である。当然ながら現在の都市のジェントリフィケーションに関する議論は当時の大阪の万国博覧会開催向けの時期に起こらないことはそれほど不思議なことではない。今日的な視点では当然ながら再開発行為におけるさまざまなアセスメントが多角的に検討されることはいままでもないと考える。今後の2025年万博開催に向けての都市機能整備に多くのステークホルダーとの対話が行われることを期待する。

以上